



# えどまえ うみ まな わ 江戸前の海 学びの環づくり 瓦版 第22号

東京海洋大学 江戸前ESD協議会 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学品川キャンパス

## 2021年 東京湾岸ミュージアム懇談会 第5回/第6回 報告 問題構造分析の実例紹介と実践

瓦版第20号と第21号で「東京湾岸ミュージアム懇談会」の第1回から第4回の概要を紹介してきました。そこで今号では、本シリーズの最終号として、第5回と第6回の概要を紹介します。2021年12月2日と12月23日にオンライン+対面でおこないました。

### 第5回：問題構造分析を行う ～方法の確認と①関係者分析

第4回では、懇談会がどこを目指しているのかを明確にするために、「アクションリサーチって何・・・？」という説明を川辺みどり先生がおこないました。その中で、参加者に向けて「『問題分析』をやってみませんか」という提案をしたところで、時間切れとなりました。

問題分析は「一つの問題に対して参加者全員で解決方法を考案すること」です。これを実施するにあたり、実は前後で一つずつやることがあります。前にすることは ① 関係者分析、後にやることは ③ 目的分析です(図1：瓦版第20号の図2の最後の図)。この3つステップはまとめて『問題構造分析』と呼ばれ、実施するためには「実際の問題」が必要です。そこで、これまで第1回から第4回まで東京湾岸ミュージアム懇談会に参加して下さっている船の科学

館の小堀信幸さんより、30分程度のお話をいただきました。その中から、現在船の科学館が抱えている問題を、参加者一人ひとりがお話を聞きながら書き出しました。書き出し方法はJamboard (Google社が無料提供する、オンライン上のホワイトボードのようなもの)を使用し、参加者はJamboard上に問題を書いた付箋をリアルタイムで貼り付けました(図2)。この付箋は、否定形の文で書くことがポイントになります。ここまできると、参加者一人ひとりは実際に考え、手を動かしますので、本懇談会に一体感がうまれました。実際に貼り付けられた付箋の数も70枚ほどになりました。

次に、先ほどの3つステップを踏むのですが、今回は少し変則的な形でおこないました。

まず、①の関係者分析は、対象となる問題に対して利害・関心を有するもの(関係者)を探索し、利害・関心事項の全体像を把握・共有することを目的とします。今回は、事前に小堀さんと相談し、事務局である江戸前ESD協議会で作成したものを、参加者のみなさんに提示して修正をしてもらいました。その結果、博物館職員の他に、関連

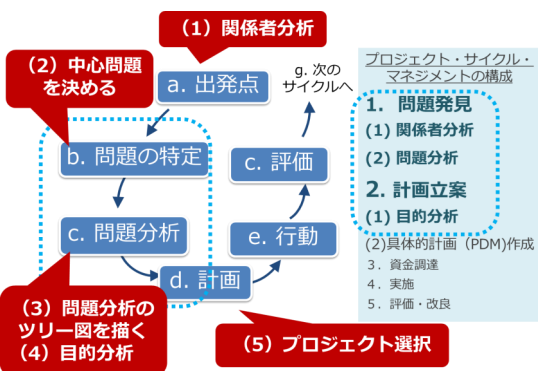


図1. 問題構造分析の流れ。(川辺みどり作成)

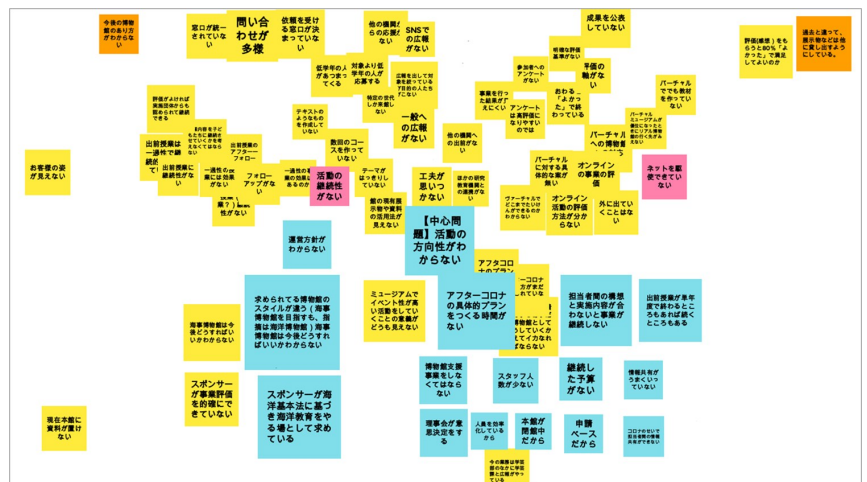


図2. Jamboardに貼り付けられた付箋。

のある学生や研究者など、関係者は10以上の団体に属するのではないかとということになりました(図3)。

次に②問題分析と③目的分析をおこなうのですが、まずは今回Jamboard上に貼られた70枚の付箋から中心問題を選定する必要があります。その中心問題を基に、結果(その問題はどういった影響があるのか)を上、原因(どうしてその問題が起こるのか)を下に、付箋の中から選んでつなぎ合わせます。つまり、中心問題の上と下に結果と原因が位置する②問題分析の図が完成することになります。ここでは、第5回と第6回

関係者(物)	人や組織について	考えられる影響や背景
学芸員4名 (学芸部の職員)	資料の収集、保管、展示及び調査研究などの専門的事項を扱う	
広報1名 (学芸員の一人)	取材の窓口、広報活動	広報の本来の役割は果たされていない人が少なく窓口も統一されていない
スポンサー	助成してくれている	
理事会	事業承認、方針の決定	
小学校、中学校	イベントの受け手	出前授業を館に依頼する館が主催するイベントのチラシを配る
イベントの参加者 (小学生)	チラシやHPでイベントに参加する人たちや出前授業先の学生	
イベント参加者の親	学校以外の教育を受けさせたい	
地方自治体の教育委員会	小中学校への窓口	小学校などにイベントのチラシを配るときに許可が必要
他の教育関係機関 (大学や法人など)	法人や協会	イベントをする際に協同
制作会社	映像制作を行う	バーチャル企画の際に依頼
ボランティア	船に乗っていた方々	船に乗っていた体験のお話をしてもらう
研究者やサークル	研究者やサークルの学生	特別展などで協力してもらう

図3. 関係者分析の結果。(尾形歌穂、丸山啓太、川辺みどり作成)

さらに③目的分析では、②問題分析で作成した系図を用います。方法は、②の系図の一つひとつを肯定的内容に作り直すことで、「原因-結果」の関係を示す付箋の系図を、「手段-目的」関係の内容に作り直します。さらにその図から、実施するプロジェクトを決定し(瓦版第20号の図2の最後の図の青の「d.計画」あるいは赤の「(5)プロジェクト選択」)、問題の解決を図ることになります。

## ~②問題分析の結果

言葉で説明しても分かりにくいので、今回私たちが実際にやってみた結果をみていきましょう。ただし、第5回ではあまり上手くいかなかったので、結局は第6回に見送りとなります。それはともかく、Jamboard上では、参加者それぞれが付箋の移動や文字を書くことが可能です。なので、活発な議論となりました。

まずは、「おそらくこれが一番大きな問題だろう」、という中心問題を選定しました。次に、参

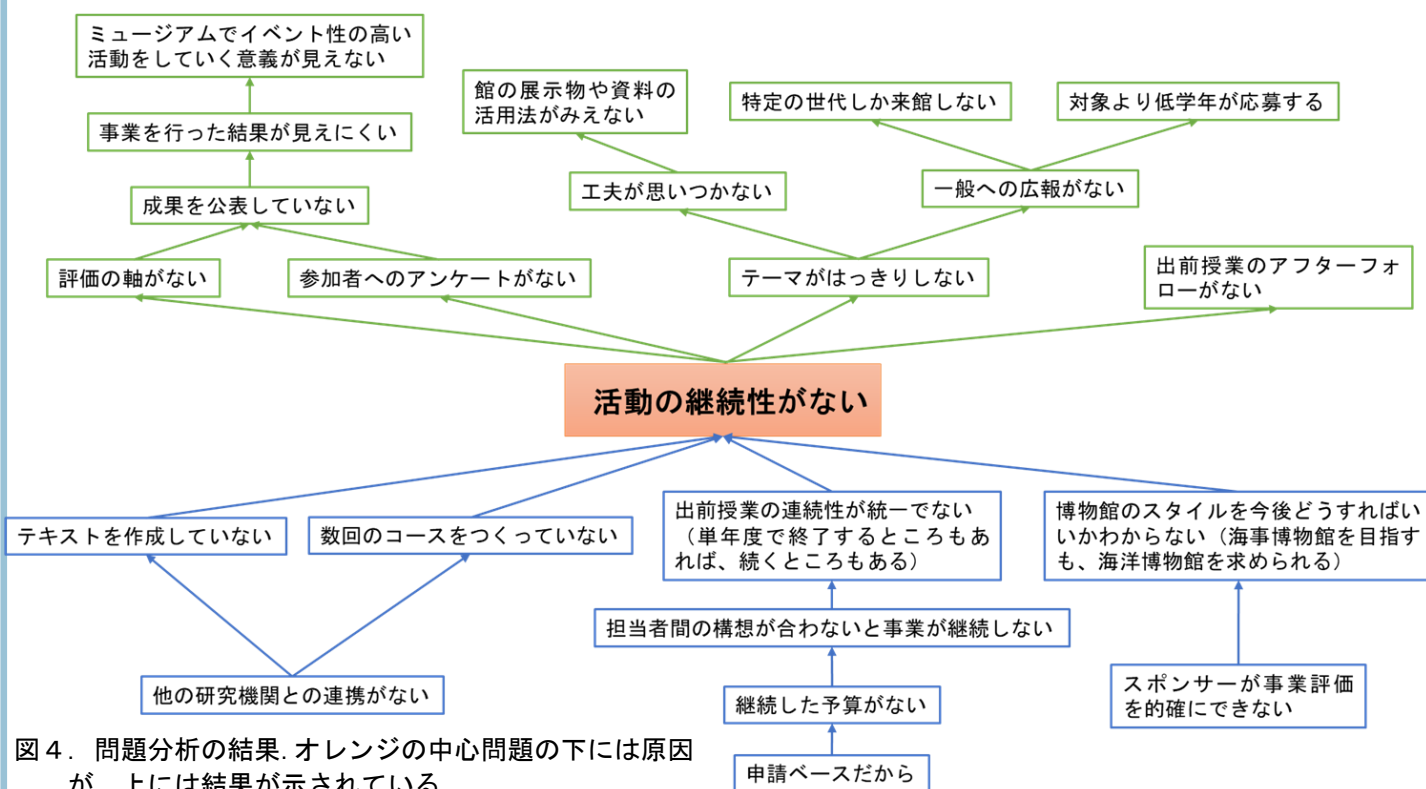


図4. 問題分析の結果. オレンジの中心問題の下には原因が、上には結果が示されている。(尾形、丸山、川辺作成)

加者のみなさんが書いてくれた付箋と付箋の関係性を考え、問題分析の図の作成を試みました。しかし図の作成が上手くいきません。そこでもう一度中心問題を選びなおしました。それでも上手く図ができません。ここまで来てようやくわかったのですが、中心問題となるような大きな問題がいくつか提示されると、問題分析の難易度が上がりました。さらにオンラインなので、付箋の理解に誤解が生じることもありました。本来なら今回で目的分析まで終える予定だったのですが、問題を解決できないまま時間となってしまいました。

そこで、問題分析と目的分析は次回までの宿題にしようという話でまとまりました。宿題については、東京海洋大学の尾形歌穂さん（修士学生）と丸山（博士研究員）が担当することになり、今回はその発表からスタートすることにしました。

## 第6回：問題分析のまとめと振り返り

第5回から3週間ほどが経ち、ついに本懇談会も最終回となりました。まずは前回の宿題を尾形さんと丸山が発表しました。

結果として、中心問題を1つに絞ることは難しかったため、「活動の継続性がない」（結果は図5の上の図）と「アフターコロナの具体的なプランをつくる時間がない」といった二つの中心問題としました。そのうち、前者の問題解決のためのプロジェクトである「連携強化作戦」というプロジェ

クトを作成しました（図5の下の図）。これは良くも悪くも、本懇談会の大きな目標である「東京湾の博物館の連携」にかなり近いものとなっていて、他の研究機関との連携の重要性を支持するようなまとめになりました。

問題分析のまとめが終了したところで、みなさんにアンケートを行いました。「やってよかった」、「ちょっと残念」、「このあと、どうする?」という3つの質問を投げかけ、やはりJamboardに付箋を張り付けてもらったところで、本懇談会は幕を閉じました。

## 本懇談会の果たした役割

瓦版第20号で述べていますが、本懇談会の目標は「東京湾の博物館の連携」です。6回の懇談会を通して、4つの博物館と1つのNPO法人が参加し、確かにネットワークを広げることができたかと思えます。特に、特定の博物館の問題をシェアし、それについて議論できたことは、連携力の強化につながったのではないかと考えていますし、それは事後アンケートからもうかがえました。一方で「最初、方向性が見えなかった」、「オンラインだと難しいところもあった」など、運営面の課題がアンケートより見えてきました。また、「ネットワークを広げる」ことを目標としていたため、課題としてどのように捉えるのかは難しいところでした。また、問題に対するプロジェクトを決定したところで幕を閉じたため、「じゃあこの後どうするの?」という疑問を持ったまま終了した参加者も多かったです。

次回はよりスムーズな進行と、はじめに懇談会の着地点を明確にしておくことが重要になると考えています。その他にも、参加する博物館やNPO法人を増やした方がいいとの指摘も目立ちます。東京湾沿岸には20を超える博物館やNPO法人が活動を行っています。皆さんへのお声掛けが、

より連携を強めるためには必要かもしれません。

（丸山啓太）

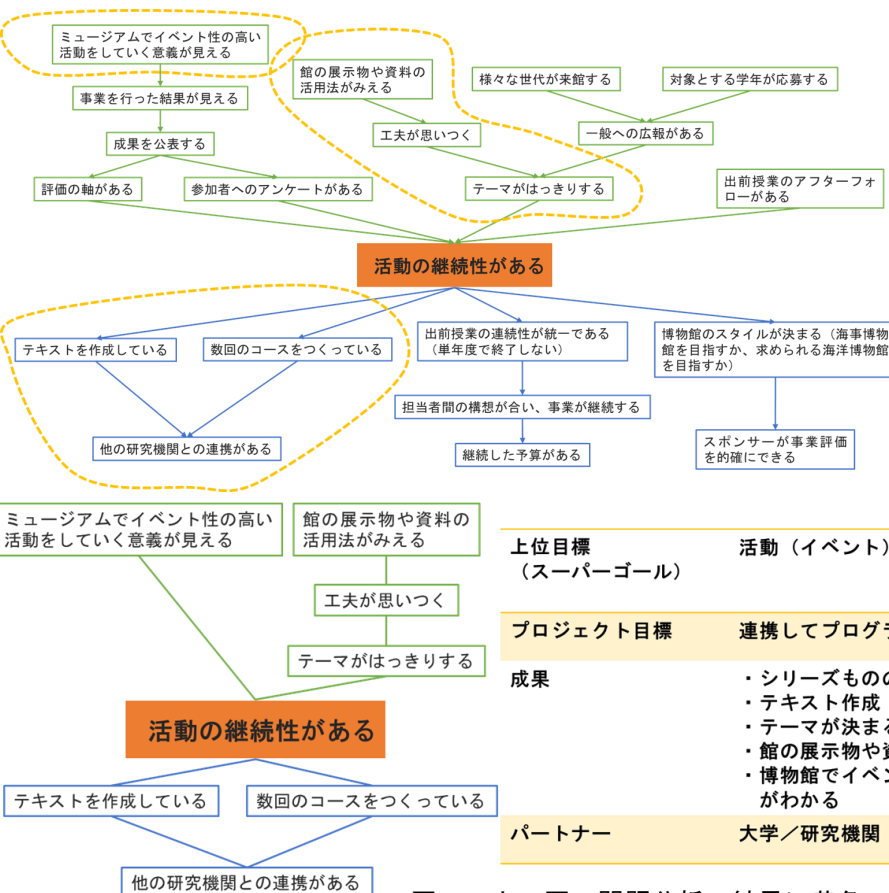


図5. 上の図：問題分析の結果に黄色のワクを付けている. 下の図：黄色のワクを使って選定したプロジェクトの例（尾形、丸山、川辺作成）.